

わが町

新訳上演

Our Town

中劇場

●前売開始：2010年10月16日（土）

作： ソートン・ワイルダー

翻 訳：水谷八也

演 出：宮田慶子

音楽／ピアノ演奏：稲本 響

出 演：小堺一機／相島一之／斉藤由貴／鷺尾真知子／中村倫也／佐藤正宏／山本 亨（台本順）ほか

企画意図

「JAPAN MEETS…」シリーズ三作目として上演されるのは、アメリカの劇作家、ソートン・ワイルダーの名作中の名作『わが町』。1938年に発表され、その年のピューリッツァー賞を受賞、その後も全世界で上演され続けており、2009年現在、ニューヨークでもロングラン公演が行われています。

あえて舞台装置をもうけず、ほぼ何もない舞台の上で役者と観客の相互の想像力ですべてを進行してゆく様式は、現代劇の原点ともなった作品であり、その後の現代劇の描かれ方に多大な影響を及ぼしている作品です。

物語を進行する舞台監督役に、そのエンターテインメント性の素養がもっとも適任である小堺一機、又、音楽に、新進気鋭のピアニスト稲本響氏を迎え、愛用の伝説的名器スタインウェイと共に、生演奏のピアノ一台で、劇空間を作り上げてゆきます。また、斉藤由貴、相島一之、鷺尾真知子、佐藤正宏ら、素晴らしいキャストが集結、物語の中心を担う二つの家族を作り出します。2011年新春、必見の舞台です。

作 品

アメリカ合衆国ニューハンプシャー州グローヴァーズ・コーナース。

1901年5月。

この町の医者であるドクター・ギブスの家にも、また隣家の住人、町の新聞の発行人・ウェブ氏の家にも、いつもと変わらない平和な一日が訪れている。ギブスの息子・ジョージとウェブの娘・エミリーは、ともに16歳で幼なじみ。二人の頭にあるのは今日の宿題のこと、将来の夢のこと、そして、ほんの少しだけ気になっている隣の家の幼なじみのこと。いつもの朝、いつもの一日。

1904年7月。高校の卒業式の直後。

今日はエミリーとジョージの結婚式。ジョージは嬉しさのあまり、朝から落ち着かない。新たな家族を迎える2組の両親の、「結婚」に対する思い、新たな家族となる若い二人への願いが語られる。

お互いの愛を再認識した二人は、町の多くの人々の祝福を存分に受けながら、幸せな結婚式を終える。

1913年 夏。

のどかだった町にも少しずつ時代の変化が現われている。馬の代わりに走るようになった自動車。かけられるようになった家の鍵。世の中は確かに変化している。

丘上の墓地でエミリーの葬式が執り行われている。ジョージと幸せな結婚生活を送っていたエミリーだったが、産後の肥立ちが悪く、命を落としてしまったのだ。悲しみに暮れるジョージ、そしてギブス家、ウェブ家の人々。そんな彼らを、今はこの世のものではなくなった墓地の住人たちが見守っている。

自分の葬式を見つめ、同じ立場となった「死者」たちに仲間入りをするエミリー。過去の幸せな日々を思い出しながら、自分にとって、家族にとって、人間にとって、世界にとって、いったい何が一番大切なのか、ということに気づいていく。

●料金 S：7,350円・A：5,250円・B：3,150円

翻訳家からのメッセージ

水谷八也

ソートン・ワイルダーの Our Town は、劇団の研究生や大学・高校の ESS の発表会などで好んで上演されてきた戯曲であり、日本でも比較的なじみのある、わかりやすい名作というイメージが強い。しかしそのわかりやすさが曲者だ。「オスカーはワイルド（乱暴）だ。しかし、ソートンはワイルダー（もっと乱暴）だ」という冗談があるが、このワイルダー、なかなか一筋縄ではいかない。劇作術においてはかなりのワイルダー振りを見せてくれる。1938年の作だが、その技法は21世紀の今でも、いや、今だからこそなお刺激的である。まずは「生」のままの Our Town を堪能してみたい。そして「死者の眼」で自分と世界を、今一度、見つめてみよう。

演出家からのメッセージ

宮田慶子

ありふれた日常の、親子関係、子供の成長、同じ町に暮らす人々の姿を率直に描き、けれど決して表層的でなく、それを、生と死、宇宙の中の地球という視点にまで俯瞰して見せ、普遍性が本来持つダイナミズムを、これほどまでに明快に提示した作品は、他にはありません。日本では、俳優養成機関などで取り上げられることも多く、また翻案化された舞台も数多く存在しますが、是非とも一度、原作にストレートに向かい合ってみなかった作品です。具体的なものを極力排したシンプルな舞台は、透明な、そしてときには力強いピアノの音色で満たされ、心の奥底と共鳴していきます。戯曲の持つスケール感を大切にしつつ、人の手による暖かさや手ざわりを感じられる舞台作りにしたいと思っています。

わが町

ソーントン・ワイルダー

Thornton Niven Wilder

アメリカを代表する劇作家・小説家。1897年生。イエール大学を卒業後、プリンストン大学大学院にてフランス文学修士課程修了。1927年に小説『サン・ルイス・レイの橋』でピューリッツァー賞を受賞し、一躍脚光を浴びる。戯曲では『水面を動かした天使』(1928)、一幕劇集『長いクリスマス・ディナー』(1931)、『わが町』(1938)、『危機一髪』(1942)、『結婚仲介人』(1954)など。『わが町』、『危機一髪』もそれぞれピューリッツァー賞を受賞している。75年12月7日没。



水谷八也

Mizutani Hachiya

1953年生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科修了。現在、早稲田大学文化構想学部教授。翻訳書にワイルダーの『危機一髪』『結婚仲介人』、アリエル・ドーフマンの『谷間の女たち』『The Other Side/線のもう側』『世界で最も乾いた土地』など。ワイルダー関係の論文に「Our Town—human mind と human nature のドラマ」「The Skin of Our Teeth における中断」「劇作家ソーントン・ワイルダー —形式としてのヴォードヴィル」「The Matchmaker —生の演劇」「“PRETENSE” の弁護 —ソーントン・ワイルダーの一幕劇集」「Thornton Wilder と Nascuntur Poetae…における詩人の肖像」「Thornton Wilder の The Wreck on the Five-Twenty-Five」などがある。

宮田慶子

Miyata Keiko

※ P2 参照